

小中学生の学びに関する 実態調査 **速報版**

ベネッセ教育総合研究所では 2014 年 2 月～3 月に、全国の小学 4 年生～中学 2 年生の子どもとその保護者を対象に、学びに関する調査を実施しました。この調査を通して明らかにしようとするのは、主に次の 2 つのことです。

- ① 子どもたちはどのように学んでいるのか。
- ② 保護者は子どもの学びにどのように関わっているのか。

この速報版では、今の子どもたちの学びの実態について主なデータを紹介するとともに、保護者の関わりが子どもにどのような影響を及ぼしているのかを探ります。

目 次

企画背景および調査設計について	2	3. 学習時間	10
調査概要	3	4. 勉強方法	11～13
基本属性	4	5. 勉強方法を教えてくれた人	14
本調査から見えてきたこと	5	6. 勉強する理由	15
		7. 学習に対する考え	16～17
【子ども調査】		8. 学習上の悩み	18
1. 勉強の好き嫌い・好きな教科	6～7	【保護者調査】	
2. 学習態度・学習習慣	8～9	9. 保護者の関わり	19～23

企画背景および調査設計について

企画背景

■世界の教育の潮流

OECD (DeSeCoプロジェクト)やACT21s (21世紀型スキル)では、変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な能力やスキルとして、他者と協力しながら問題解決していく力が重視されており、その要素として自律性や新しい物事のコ考え方を創造し、表現する力などが求められている。

■PISAの調査結果にみられる日本の子どもたちの学習課題

全体的に日本の子どもの学力は世界の高いレベルに位置しているが、学習意欲の低さが問題視されている。

■次期学習指導要領の検討

次期学習指導要領では、これからの社会変化を見据えて身につけるべき能力や資質、また主体的に学ぶことを重視する方向性で内容の検討がなされている。(2014年時点)

21世紀を生きていく上で土台となる「主体的に学ぶ力」をどう伸ばしていくか？



【本調査の目的】

子どもたちが「主体的に学ぶ力」を身につけるための

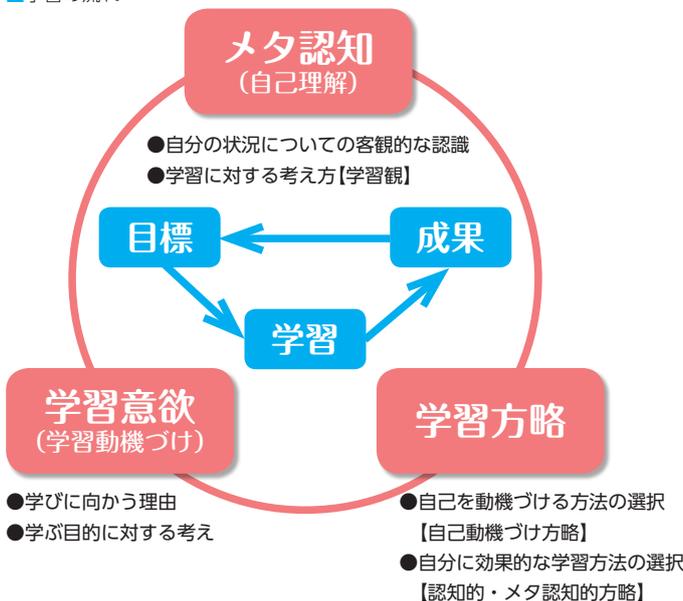
- ・ 学年ごとの学習動機づけのあり方
- ・ 学年ごとに用いる学習方略と身につけ方
- ・ 子どもの学習意欲の向上や学習方略の獲得に影響する保護者の関わり

などを明らかにする

調査設計

■「主体的な学び」の3要素

■学習の流れ



■「主体的な学び」の学習モデル

教育心理学研究の「自己調整学習」理論では、自ら目標を設定し、学習を主体的に進め、成果につなげるために、「主体的な学び」の3要素「メタ認知」「学習意欲」「学習方略」が重要だとされています。

本調査では、「主体的に学ぶ力」を伸ばす上で、それぞれの要素がどう影響しているか、また各要素の間にどのような関連があるかを把握することができるよう調査項目を設定しています。

*「自己調整学習」理論を参考に「主体的な学び」の学習モデルを作成。

調査概要

調査テーマ

小中学生の学びや保護者の関わりについての意識と実態

調査方法

郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

調査時期

2014年2月～3月

調査地域・対象・サンプル構成

- 調査対象：全国の小学4年生～中学2年生の子どもとその保護者
- 発送数：各学年2,000組ずつ

		発送数(組)	有効回収数(組)	有効回収率		
小学4年生	モニター	1,132	1,040	91.9%	小学生の有効回収数：3,450組	
	非モニター	868	177	20.4%		
	合計	2,000	1,217			
小学5年生	モニター	1,060	969	91.4%		
	非モニター	940	215	22.9%		
	合計	2,000	1,184			
小学6年生	モニター	907	838	92.4%		
	非モニター	1,093	211	19.3%		
	合計	2,000	1,049			
中学1年生	モニター	850	714	84.0%		中学生の有効回収数：1,959組
	非モニター	1,150	219	19.0%		
	合計	2,000	933			
中学2年生	モニター	873	791	90.6%		
	非モニター	1,127	235	20.9%		
	合計	2,000	1,026			

- 注1) 表内の「モニター」は東京大学 社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの調査モニターを示す。
 注2) 「非モニター」はサンプルを確保するために「モニター」とは別に全国の小学4年生～中学2年生のリストから無作為に抽出し、協力を依頼した親子を示す。
 注3) 「有効回収数」は、回収した調査票のうち、学年が不明な票、子ども票または保護者票のどちらかしか回収できていない票を除いた数である。

調査項目

【子ども調査の主な項目】

勉強の好き嫌い／好きな教科／学校で受けている授業方法／得意なこと／学校での学習態度や家庭での学習習慣／家庭での勉強時間／成績の自己評価(中学生のみ)／勉強方法／勉強方法を教えてくれた人／勉強する理由／自己認識／学習に対する考え／学習上の悩み／子どもから見た父親・母親の関わりなど

【保護者調査の主な項目】

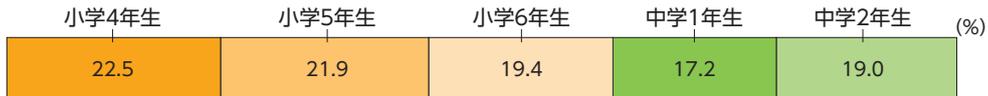
子どもの生活や学習習慣に対する評価／基本的な養育態度／子どもの勉強への関わり／1ヶ月の教育費／子どもと一緒にすること／子どもの成績への評価(小学生のみ)／子どもに身につけてほしい力／子どもとの会話／子どもの学習に関する悩みや気がり／社会観や価値観／学習に対する自身の考え／子どもの生活や勉強への満足度など

■速報版を読む際の注意点

- ① 小中学生の学びや保護者の関わりについての意識と実態では、興味深い特徴が浮かび上がっているが、こうした特徴には小中学生の発達状況、学習の量や内容の難易度などが影響している可能性が考えられる。このため、単純に小中学生間の数値を比較することには注意が必要である。
- ② 本文中、「小学生」は小学4～6年生の全体を、「中学生」は中学1～2年生の全体を示す。
- ③ 図表において、小学4～6年生、中学1～2年生の有効回収数すべてを集計している場合は、サンプル数は表示しない(P.4「基本属性」を除く)。
- ④ 図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

基本属性

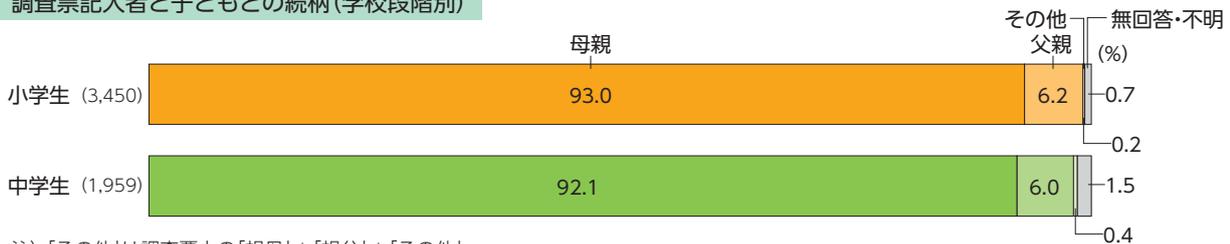
子どもの学年



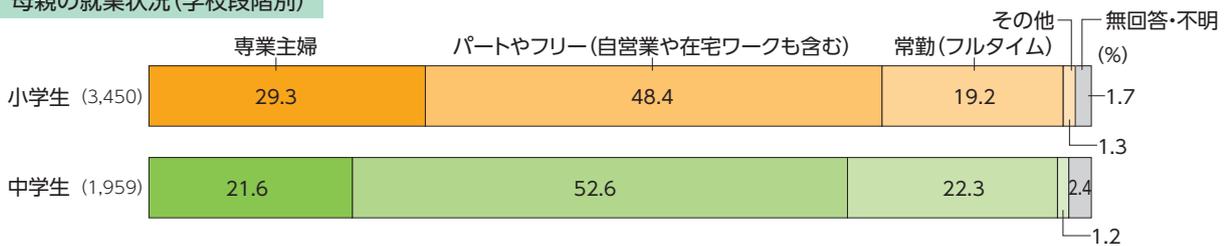
子どもの性別(学校段階別)



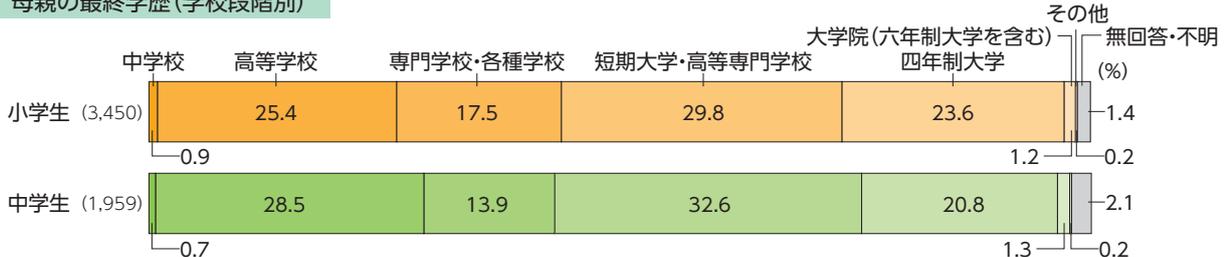
調査票記入者と子どもとの続柄(学校段階別)



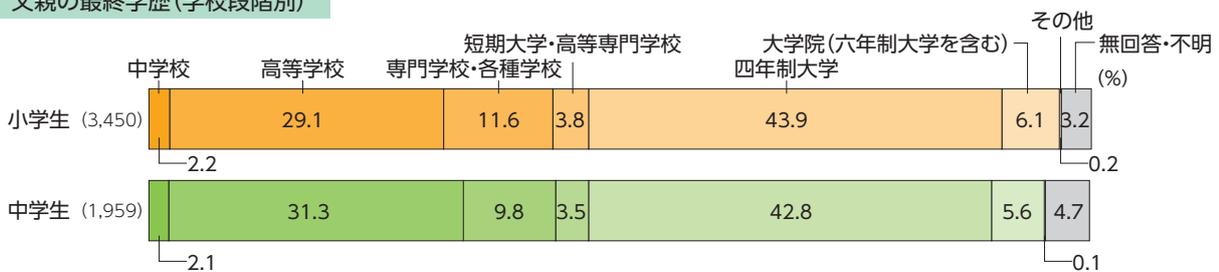
母親の就業状況(学校段階別)



母親の最終学歴(学校段階別)



父親の最終学歴(学校段階別)



父親と母親の平均年齢(学校段階別)

	(単位: 歳)	
	小学生	中学生
父親	43.3	45.9
母親	41.3	43.9

【調査の目的】

本調査は、子どもたちの学びに関する意識や実態を明らかにするとともに、**どのような学びのあり方が成績をはじめとするアウトプットに効果をもっているのか**を検討することを目的にしている。経験則として、勉強のできる子どもほど成績を上げるコツのようなものを習得している人は多い。しかし、科学的にみたときにそれは正しいのか。教育心理学では「自己調整学習」に関する一連の研究のなかでエビデンスが積み重ねられてきたが、実証的なデータは一般的な保護者や教員の目に触れることが少なかった。そこで今回、「自己調整学習」の理論を参考にした調査を行うことで、子どもたちの学びの実態をとらえ、よりよい学習のあり方について検討したいと考えた。

【成績と相関がある要因】

成績と相関がある要因として真っ先に思い浮かぶのは、「学習時間」である。一般に、時間を十分にとって学習している子どもの方が、学力が高い。そのことは、本調査からも明らかだ。P.10の図3-2に示しているように、**成績上位層ほど家での学習時間は長く、下位層ほど短い**。とはいえ、平均時間に換算して、両者の差は20~30分程度。思ったほどの差はない。また、学習時間の長短と成績の上下をクロスさせると、学習時間が短いのに成績がよい子どもが一定割合で存在するのも事実である。今までは学習の「量的側面」を重視して、授業時数や宿題・補習の増加など、量を増やすことで学力の維持・向上に一定の成功を収めてきた。しかし、時間は限られており、量を増やすにも限界がある。今後は、**学習のあり方そのものをどう変えていくかという「質的側面」の改善を重視することが求められる**だろう。たとえば、P.13の図4-3のように、学習時間が比較的短くても高い成績を維持している子どもは、「プランニング方略」や「モニタリング方略」のような客観的な自己理解（メタ認知）を用いた方法を多く取り入れ、問題を解く際にも意味や考え方をよく確かめている。こういう子どもたちは学習の質が相対的に高いといえる。

【「質」に注目した学習のあり方の改善と支援を】

ところで、学習の「質」といっても、人によってイメージが異なりそうだ。そこで、今回は「自己調整学習」の理論を参考にしつつ、**「主体的な学び」に必要な要素として「メタ認知（自己理解）」「学習意欲（学習動機づけ）」「学習方略」の3つを設定**し、それぞれについて調べることにした。さらには、**保護者にも調査を行うことで、保護者による働きかけの影響についての検討**も試みた。そのなかでは、成績上位層が高い内発的動機づけをもって学習していること、そのような子どもは問題を解く際に考え方などのプロセスを重視する傾向が強いことが明らかになった。さらには、保護者が内発的動機づけを高めるような支援をしているケースで子どもの成績は相対的に高く、保護者の働きかけの重要性が改めて示された。この「速報版」のなかでは、調査結果に加えて、「基礎知識」として学習の質を高めるのに重要なポイントとなる用語を解説している。そちらも併せて参照してほしい。

どのように学習の質を高めていくかは、子どもの発達や学力の状況によって異なる。メタ認知力が高まる一定の学年以上の成績上位層は、学習の質を高めるうえで自分にとって効果的な学習方法を選択、実行でき、それがさらに高い成果につながるといった好循環を生んでいる。学年が低い子どもや成績下位層に、その循環をいきなり作るのは難しいかもしれない。しかし、**主体的に学ぶためには、そのような自律的な学習のやり方を獲得していかなければならない**。そのために、保護者や教員は何をすればよいか、ともに考えていきたい。この「速報版」が、その一助になれば幸いに思う。

1 勉強の好き嫌い・好きな教科

勉強が「好き」と答えた小学生は6割。だが学年が上がるにつれてその割合は減少し、中学生では4割弱にとどまる。

小学4年生では7割弱が勉強が「好き」(「とても」+「まあ」以下同様)と答えているが、学年が上がるとその割合は下がり、小学6年生では5割5分、中学2年生では4割弱となっている。特に小学6年生から中学1年生の間で減少幅が大きい。成績別にみると、小学生では成績中・下位層でも勉強が「好き」と答える子どもが3～4割ほどいるが、中学生になると成績中・下位層で「好きではない」の割合が増える。

Q あなたは勉強がどれくらい好きですか。

図1-1 勉強が好きかどうか(学校段階別)

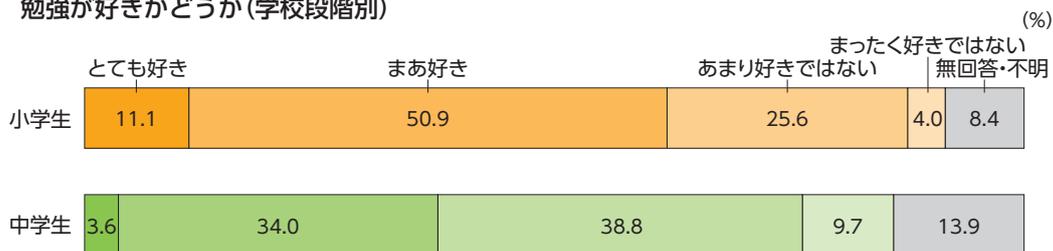


図1-2 勉強が好きかどうか(学年別)

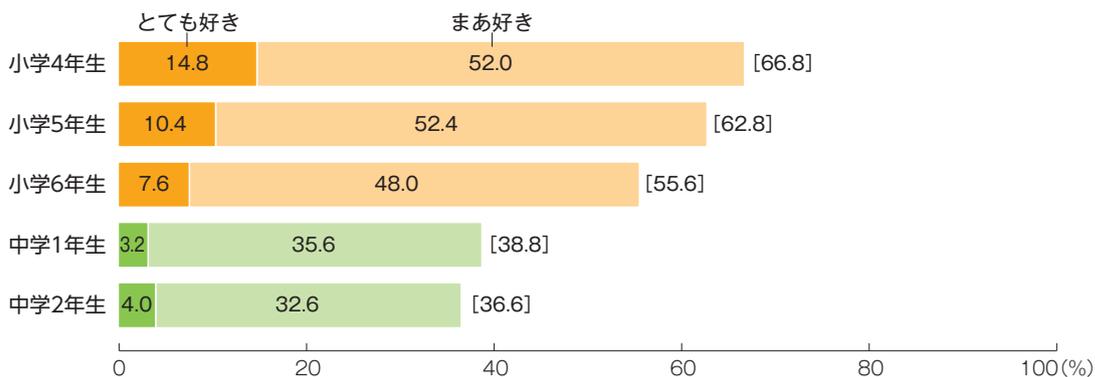
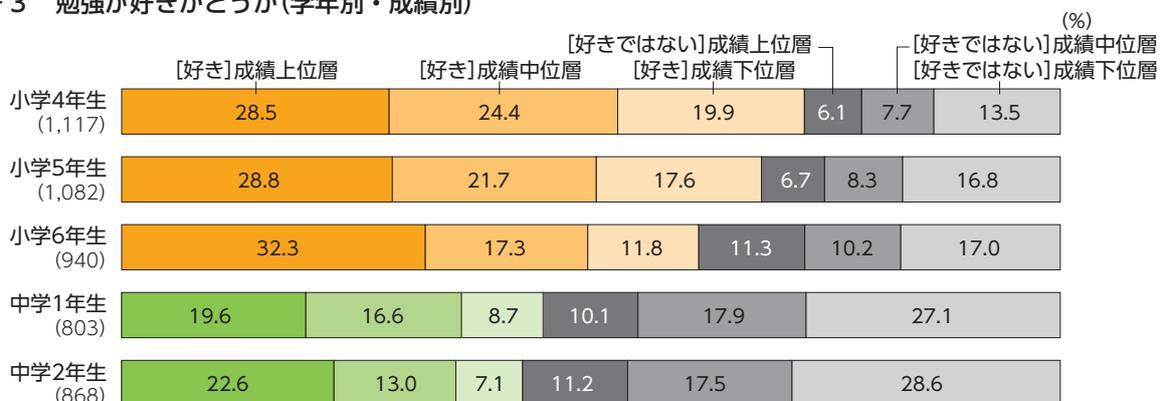


図1-3 勉強が好きかどうか(学年別・成績別)



注1) 各横棒の外側にある数値は「とても好き」+「まあ好き」の%。(図1-2)

注2) 「好き」は「とても好き」+「まあ好き」の%。「好きではない」は「あまり好きではない」+「まったく好きではない」の%。無回答・不明を除外して数値を算出した。(図1-3)

注3) 成績の3分類は国語・算数(数学)・英語(中学生のみ)・理科・社会の成績の評価から得点を算出し、さらに成績「上位層」「中位層」「下位層」に3分割したもの。(図1-3)

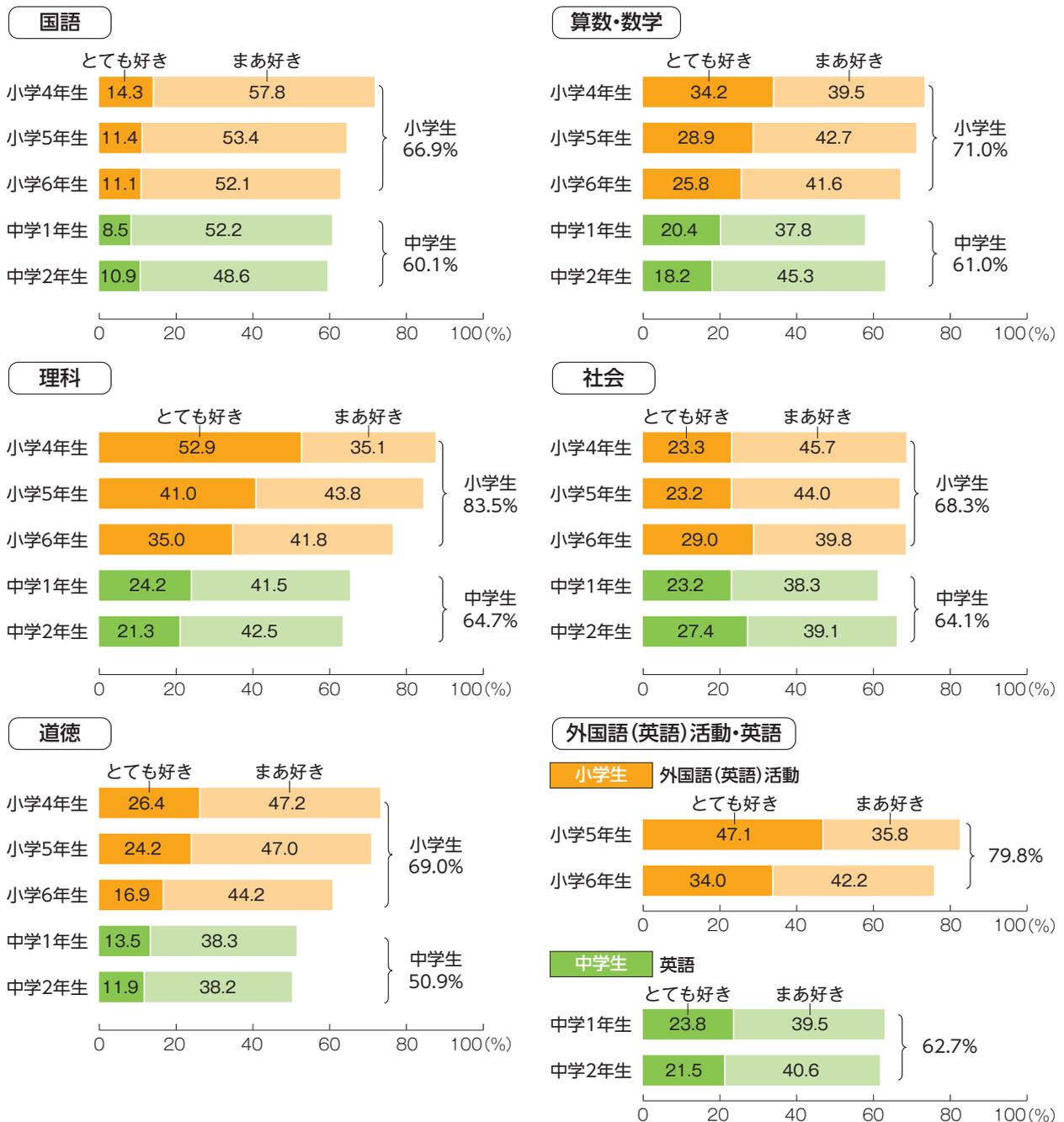
注4) ()内はサンプル数。

教科(活動)ごとにみても、学校段階・学年が上がるにつれて「好き」の割合は減少する。特に理科と道徳の減少幅が大きい。

小学生と中学生で各教科を「好き」(「とても」+「まあ」以下同様)と答えた割合を比較してみると、国語・社会では「好き」の減少幅が小さいのに対し、算数・数学や理科、道徳は減少幅が大きい。特に理科では約20ポイントも減少している。また小学校での外国語(英語)活動は約8割の小学生が「好き」と答えているが、中学生で英語が「好き」と答えたのは6割である。

Q あなたは次のような学校の時間がどれくらい好きですか。

図1-4 勉強が好きかどうか(学年別・教科別)



注) グラフ外の小学生数値は小学4～6年生の平均(外国語活動は小学5～6年生の平均)、中学生数値は中学1～2年生の平均である。

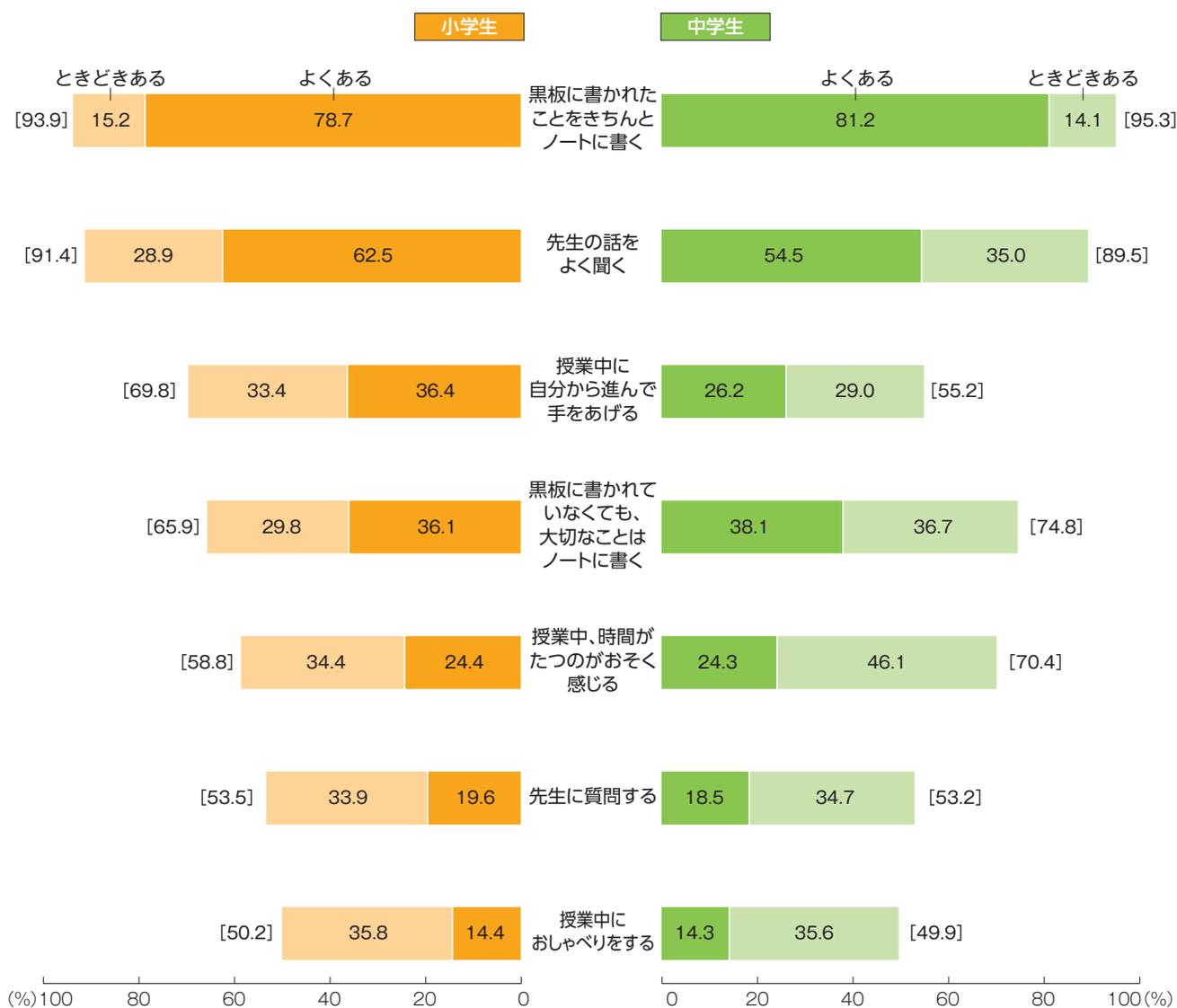
2 学習態度・学習習慣

「授業中に自分から進んで手をあげる」割合は小学生で約7割、中学生で5割5分。
「先生に質問する」のは小中学生とも5割。

9割の小中学生が「黒板に書かれたことをきちんとノートに書く」「先生の話をよく聞く」ことが「ある」（「よく」+「ときどき」以下同様）と答えている。一方で、「授業中に自分から進んで手をあげる」ことが「ある」かどうかは、小学生と比べて中学生ではその割合が減少する。また、「授業中、時間がたつのがおそく感じる」ことが「ある」中学生は7割で、小学生と比べて大幅に増加する。

Q ふだん学校や家で勉強しているとき、次のことがどれくらいありますか。

図2-1 学校での学習態度(学校段階別)



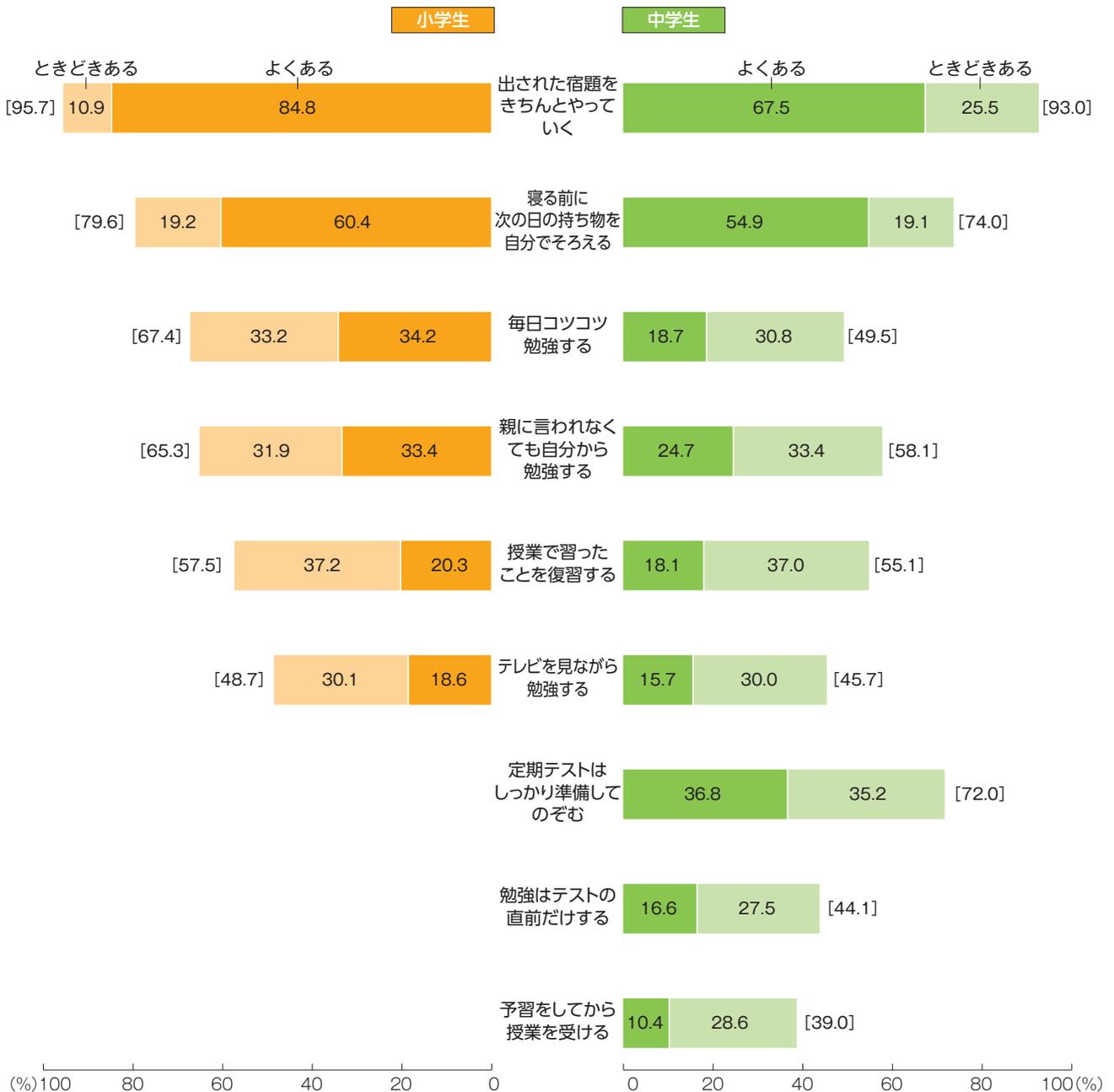
注) 各横棒の外側にある数値は「よくある」+「ときどきある」の%。

9割以上の小中学生が「出された宿題をきちんとやっていく」と回答。「勉強はテストの直前だけする」中学生は4割。

約6～6割5分程度の小中学生が「親に言われなくても自分から勉強する」ことが「ある」（「よく」+「ときどき」以下同様）と答えている。「毎日コツコツ勉強する」ことが「ある」と答えた小学生は7割弱であるのに対し、中学生では約5割と減少している。中学生のテスト勉強については、7割が「しっかり準備してのぞむ」と答えている一方で、4割は「勉強はテストの直前だけする」と答えている。

Q ふだん学校や家で勉強しているとき、次のことがどれくらいありますか。

図2-2 家での学習習慣(学校段階別)



注1) 各横棒の外側にある数値は「よくある」+「ときどきある」の%。

注2) 「定期テストはしっかり準備してのぞむ」「勉強はテストの直前だけする」「予習をしてから授業を受ける」は中学生にのみたずねた。

平日の家での平均勉強時間は小学6年生で1時間30分、中学2年生で1時間25分。

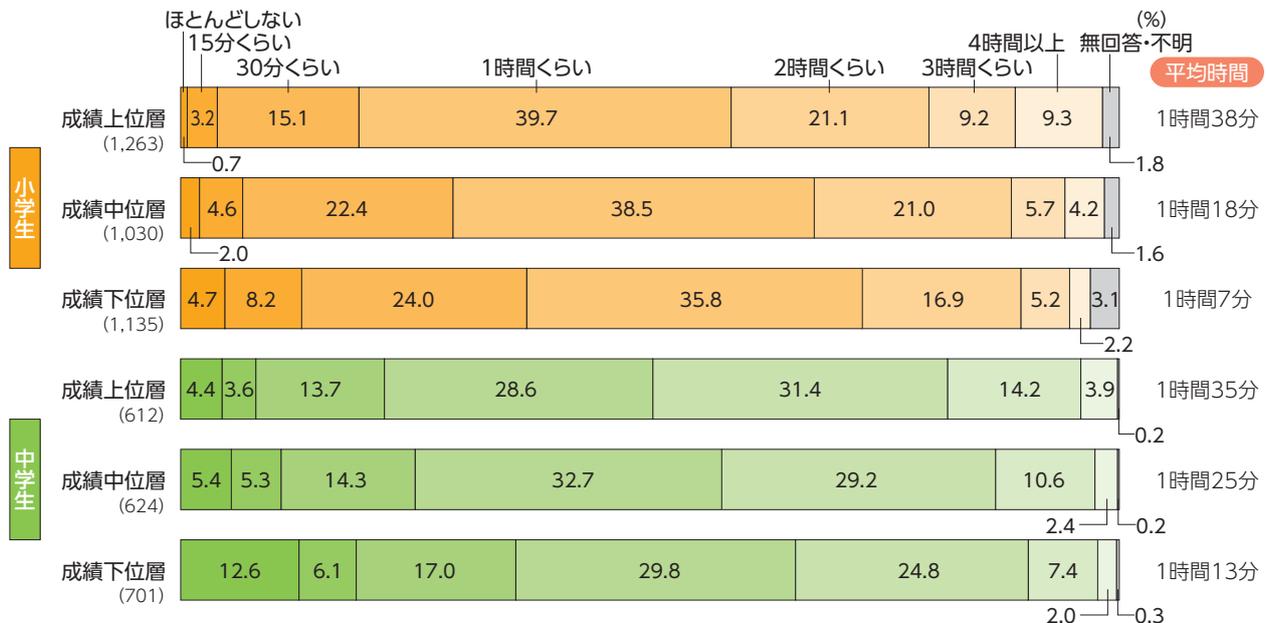
小学生は学年が上がるにつれて、平日(学校がある日)の家での平均勉強時間が長くなる傾向にある。だが、中学1～2年生は小学6年生と比べて、平均勉強時間は短くなっている。成績別に見てみると、小中学生ともに成績上位層ほど平日の家での平均勉強時間は長い。また、小学生と比べて中学生では「ほとんどしない」と答えた割合が高く、とくに成績下位層で1割が「ほとんどしない」と答えている。

Q 家での勉強時間についてお聞きします。

図3-1 平日(学校がある日)の家での勉強時間(学年別)



図3-2 平日の家での勉強時間(成績別・学校段階別)



注1) 塾や家庭教師について勉強する時間を含む。(図3-1、2)

注2) 「4時間以上」は「4時間くらい」+「5時間くらい」+「6時間以上」。(図3-1、2)

注3) 平均時間は「ほとんどしない」を0時間、「15分くらい」を15分、「5時間くらい」を5時間、「6時間以上」を6時間のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。(図3-1、2)

注4) 成績の3分類は国語・算数(数学)・英語(中学生のみ)・理科・社会の成績の評価から得点を算出し、さらに成績「上位層」「中位層」「下位層」に3分割したもの。(図3-2)

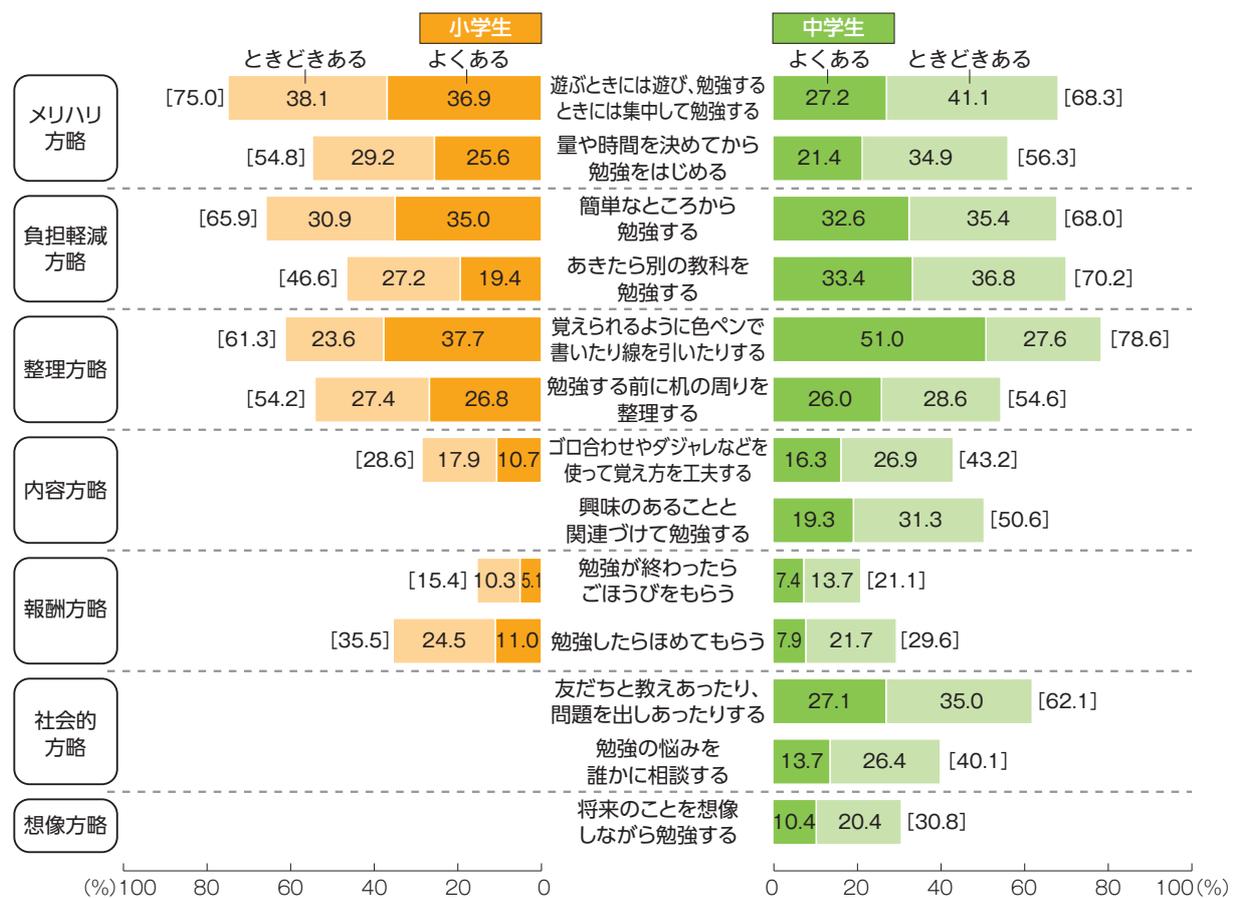
注5) ()内はサンプル数。

遊びと勉強にメリハリをつけて勉強している小中学生は7割前後。

勉強のやる気を高めるための方法として、「遊ぶときには遊び、勉強するときには集中して勉強する」(小学生75.0%、中学生68.3%)、「覚えられるように色ペンで書いたり線を引いたりする」(小学生61.3%、中学生78.6%)ことが「ある」(「よく」+「ときどき」以下同様)と回答した小中学生は多い。また小学生で「簡単などころから勉強する」(65.9%)、中学生では「あきたら別の教科を勉強する」(70.2%)の割合が高い。小学生と中学生の発達状況、学習の量や内容の難易度が子ども自身のやる気を高める方法の違いを生んでいる可能性があると考えられる。

Q 勉強のやる気を高めるために、次のことがどれくらいありますか。

図4-1 勉強のやる気を高める方法(学校段階別)



注1 「興味のあることと関連づけて勉強する」「友だちと教えあったり、問題を出しあったりする」「勉強の悩みを誰かに相談する」「将来のことを想像しながら勉強する」は中学生にのみたずねた。

注2 各横棒の外側にある数値は「よくある」+「ときどきある」の%。

基礎知識…自己動機づけ方略

伊藤崇達・神藤貴昭(2003)「心理学研究」より引用

自己動機づけ方略	学習に向けて自らの意欲を高めるために、用いる方略のことである。
①メリハリ方略	学習時間の区切りをうまくつけて集中力を高める方略。
②負担軽減方略	得意なところや簡単などころから勉強したり、あきたら別のことをしたり、休憩したりしてやる気を高める方略。
③整理方略	ノートのまとめ方や、部屋や机などの環境を整えることでやる気を高める方略。
④内容方略	学習内容を身近なこと、よく知っていることや興味のあることと関連づけてやる気を高める方略。
⑤報酬方略	親や先生などからのごほうび(飲食や金銭的なもの)などでやる気を高める方略。
⑥社会的方略	友だちとともに学習をしたり、友だちや先生に相談したりしてやる気を高める方略。
⑦想像方略	将来のことを考えたり、積極的な思考をしたりしてやる気を高める方略。

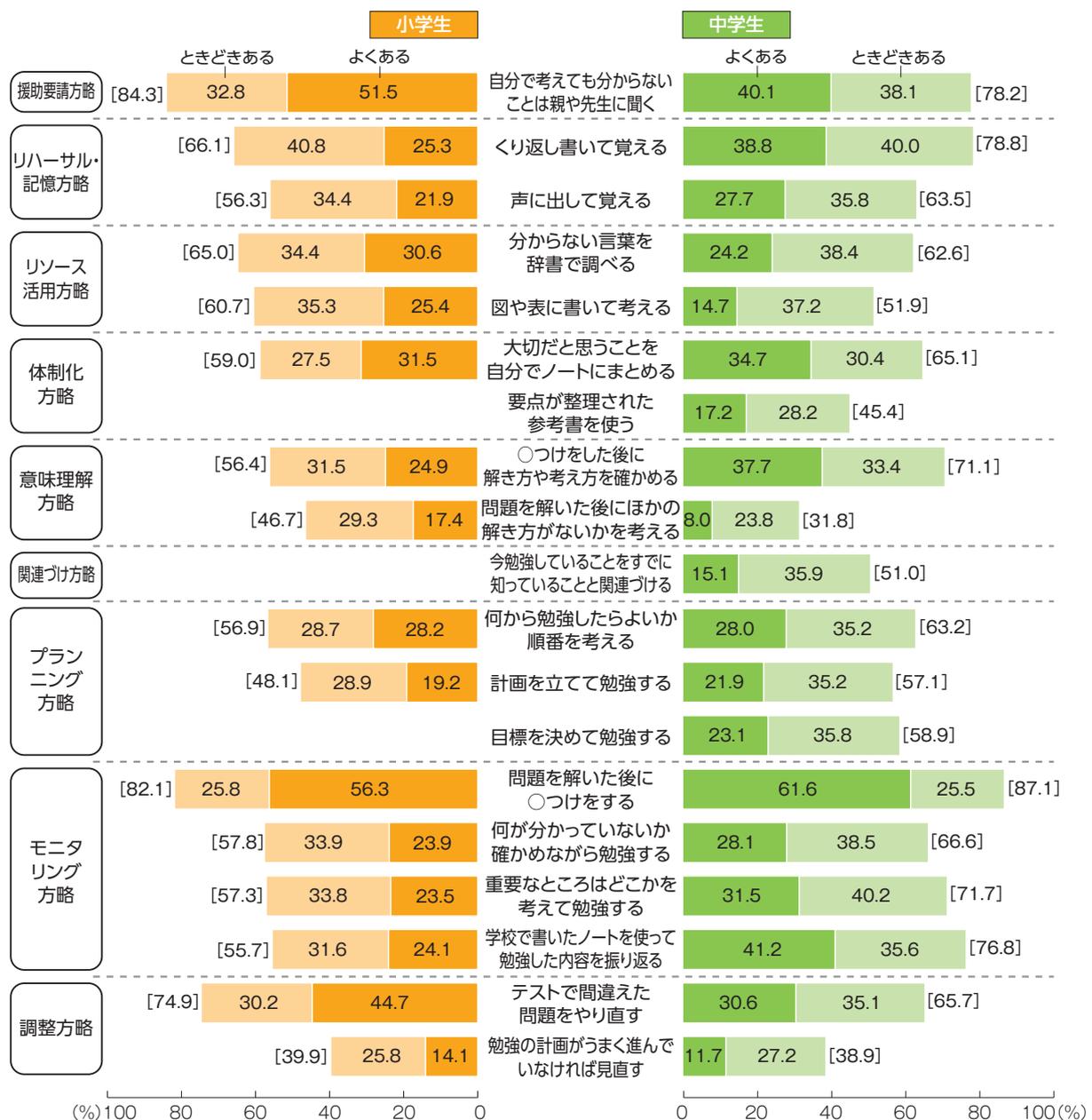
4 勉強方法（認知的・メタ認知的方略）

勉強方法でもっとも多い回答は、小学生「自分で考えても分からないことは親や先生に聞く」84.3%、中学生「問題を解いた後に○つけをする」87.1%。

勉強方法をみると、「自分で考えても分からないことは親や先生に聞く」「問題を解いた後に○つけをする」は小中学生ともよく使用され、8割弱～9割弱（「よく」+「ときどき」以下同様）である。自分以外の助けをうまく利用したり、自分の学習の達成状況を確認したりして勉強を進めていることがわかる。一方、中学生になると、「重要なところはどこかを考えて勉強する」「○つけをした後に解き方や考え方を確かめる」の使用頻度が高くなる。しかし、「問題を解いた後にほかの解き方がないかを考える」（小学生46.7%、中学生31.8%）、「テストで間違えた問題をやり直す」（小学生74.9%、中学生65.7%）は、小学生のほうが中学生より使用頻度が高い。

Q 勉強するときに、次のことがどれくらいありますか。

図4-2 勉強方法(学校段階別)

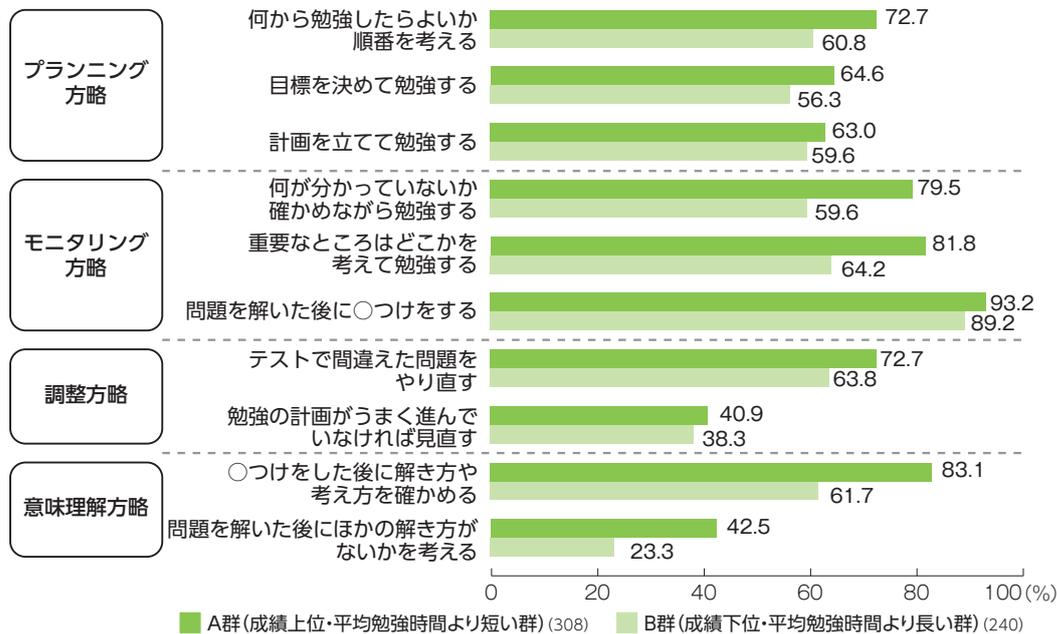


勉強方法を工夫することで、短い時間でも学習効果をあげることが可能。

勉強方法を工夫することで効果的な学習ができるのか。成績(上位・中位・下位)と勉強時間(平均より長い・短い)をかけ合わせて6群にし、そのうち成績上位・勉強時間が平均より短い群(A群)と成績下位・勉強時間が平均より長い群(B群)を取り上げ、勉強方法の使用状況を見てみた。図4-3から分かるように、B群よりA群のほうが、すべての勉強方法において使用頻度が高い。とくに「何が分かっていないか確かめながら勉強する」「〇つけをした後に解き方や考え方を確かめる」では、A群のほうが20ポイントぐらい高い。一定の勉強時間を確保することはもちろん大切だが、勉強方法の工夫も学習の効果を上げるうえで重要であるといえる。

Q 勉強するときに、次のことがどれくらいありますか。

図4-3 勉強方法(成績×平均勉強時間 中学生)



注1) 「よくある」+「ときどきある」の%。

注2) 成績の自己評価から総得点を算出し、さらに「成績上位」・「成績中位」・「成績下位」と3分割した。

平日の家での勉強時間「ほとんどしない」「15分くらい」～「6時間以上」から平均勉強時間を算出し、「平均勉強時間より長い群」と「平均勉強時間より短い群」と2分割した。成績と平均勉強時間とかけ合わせた6群のうち、「成績上位・平均勉強時間より短い群」と「成績下位・平均勉強時間より長い群」の数値を図示した。

注3) ()内はサンプル数。

基礎知識…認知的方略・メタ認知的方略 伊藤崇達(2009)『自己調整学習の成立過程—学習方略と動機づけの役割』(北大路書房)より引用・作成

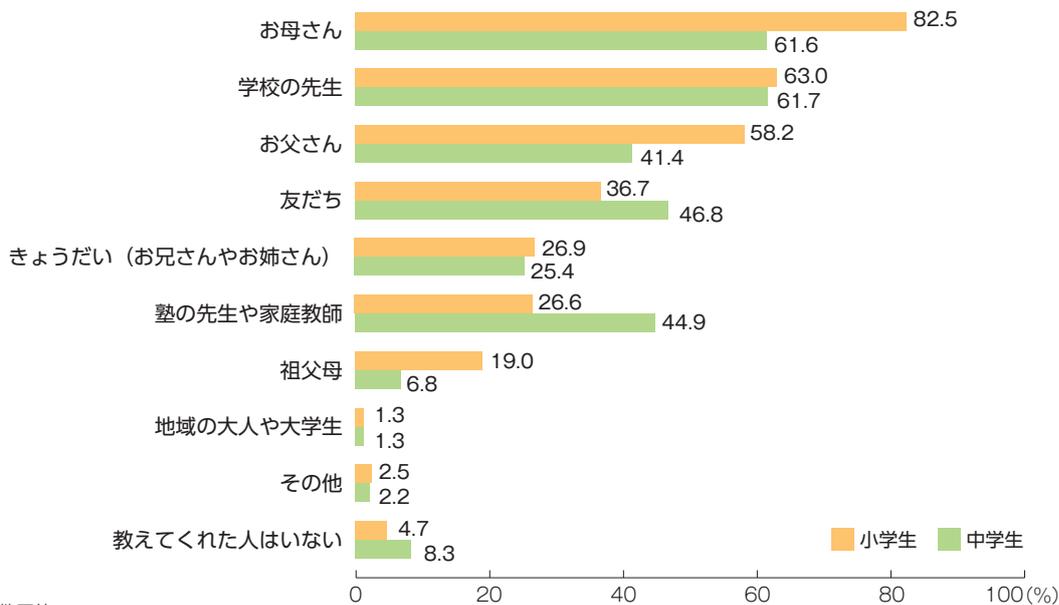
認知的方略	自分自身の記憶や思考などの認知的プロセスを調整することで効果的な学習を促す方略のことである。
①援助要請方略	友だちや先生、親などの他者からの援助を受けたりすることで、理解や思考を深める方略。
②リハーサル・記憶方略	学習内容を覚えるために、くり返し暗唱したり、反復して書いたりする方略。
③リソース活用方略	図や表などを活用したりすることで、理解や思考を深める方略。
④体制化方略	複数の学習内容を分類・整理しながら関係を持つようにまとまりをつくる方略。
⑤意味理解方略	解き方、考え方を確かめながら、学習内容の意味を理解し、思考を深める方略。
⑥関連づけ方略	今までの学習内容と関連づけ、日常生活と関連づけることで、内容理解を深める方略。
メタ認知的方略	自分の思考や行動を客観的に把握し認識すること(メタ認知)を通じて、自己調整によって学習の効率化を図る方略のことである。
⑦プランニング方略	課題を分析し、目標を自ら設定して、目標達成に向けた計画を立てる方略。
⑧モニタリング方略	自分で設定した目標や計画が予定通りに進行しているかどうかを定期的に確かめながら、目標達成に向かって学習を進めていく方略。
⑨調整方略	必要に応じて自分で設定した計画や方略を修正したりしながら、目標達成に向かって学習を進めていく方略。

勉強方法を教えてくれた人として、「お母さん」「学校の先生」を選択した小中学生は6～8割。

勉強方法を教えてくれた人をたずねたところ、「お母さん」「学校の先生」の選択率は小中学生とも高く、6割を超える。とくに「お母さん」を選択した小学生は8割に上った。また特徴として、小学生では、「お母さん」「お父さん」といった家族を選択した比率が高い。しかし、中学生になると、家族の選択率が下がり、「友だち」や「塾の先生や家庭教師」の選択率が上がる。

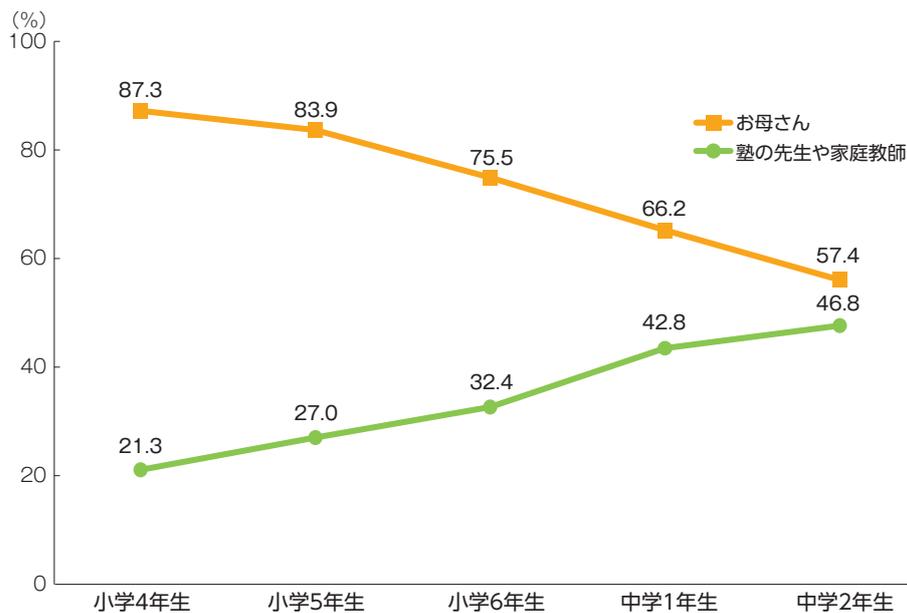
Q 勉強のやり方について、あなたに教えてくれた人はいますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

図5-1 勉強方法を教えてくれた人(学校段階別)



注) 複数回答。

図5-2 勉強方法を教えてくれた人(学年別)



注) 勉強方法を教えてくれた人のうち、「お母さん」「塾の先生や家庭教師」をピックアップし、学年別のデータを図示した。

6 勉強する理由 (学習動機づけ)

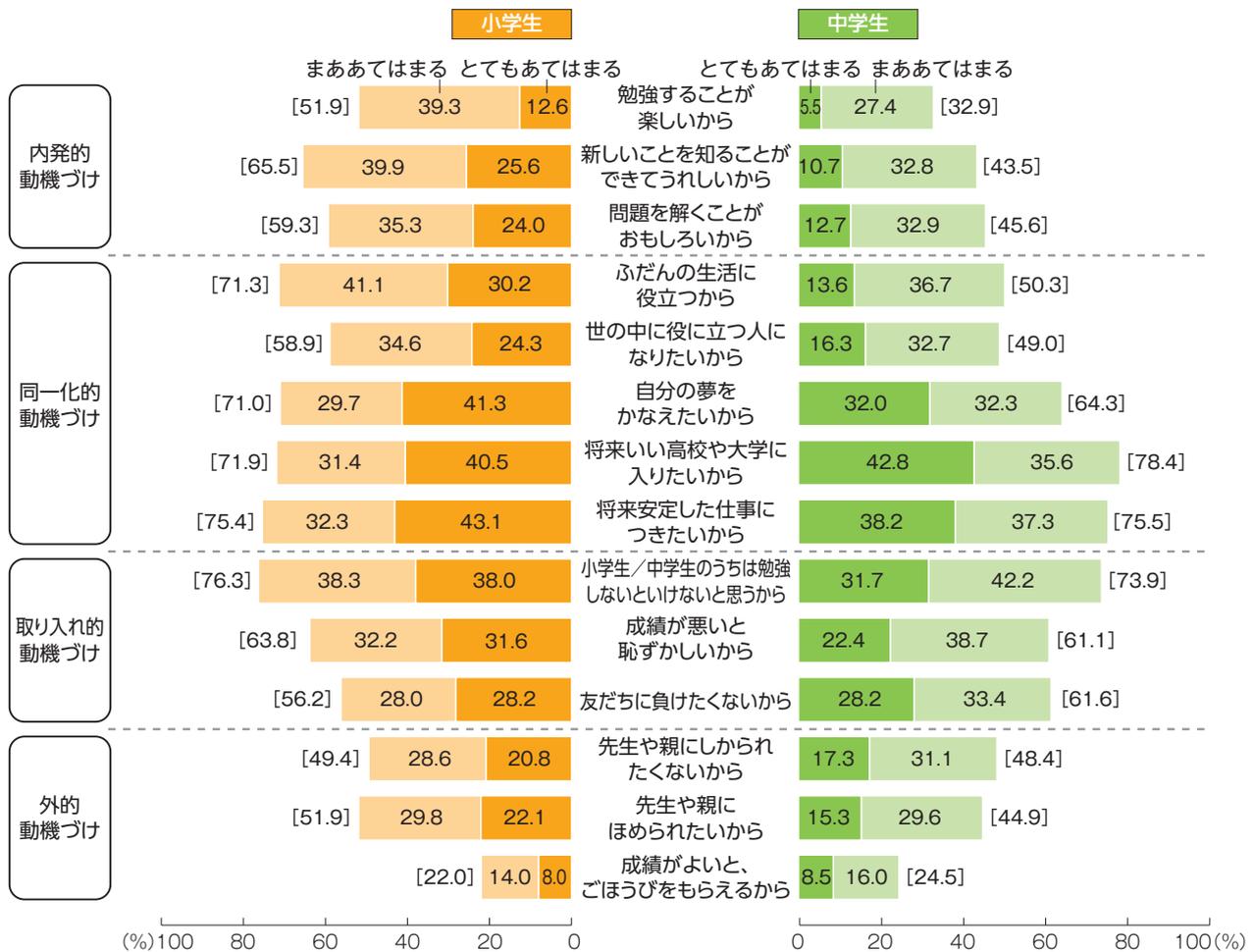
【子ども調査】

中学生は小学生と比べて、内発的動機づけで勉強する割合が低く、進学や他者との競争を動機にして勉強する割合が高くなる。

小学生は中学生と比べて「勉強することが楽しいから」「新しいことを知ることができてうれしいから」「問題を解くことがおもしろいから」といった内発的動機づけを理由に勉強する割合が高い。一方で中学生は「将来いい高校や大学に入りたいから」「友だちに負けたくないから」などの理由で勉強すると答えた割合が高い。中学生は身近な目標を設定することで、自分を動機づけて学習しているようだ。

Q あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図6-1 勉強する理由(学習動機づけ)(学校段階別)



注) 各横棒の外側にある数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

基礎知識…学習動機づけ

鹿毛雅治(2013)『学習意欲の理論—動機づけの教育心理学』(金子書房)を参考に作成

学習意欲を高めて行動に向かわせることを「学習動機づけ」と呼ぶ。「学習動機づけ」は次の4つに分類できる。

A 内発的動機づけ	内容に対する好奇心や関心によってもたらされる動機づけ。
B 外発的動機づけ	内容そのものではなく、外的な目的や理由によってもたらされる動機づけ。
B-1 同一化的動機づけ	学習者自らの価値観や信念と一致した理由による動機づけ。
B-2 取り入的動機づけ	周囲の価値観や実行しない場合の不安などによる動機づけ。
B-3 外的動機づけ	義務や賞罰、強制などによってもたらされる動機づけ。

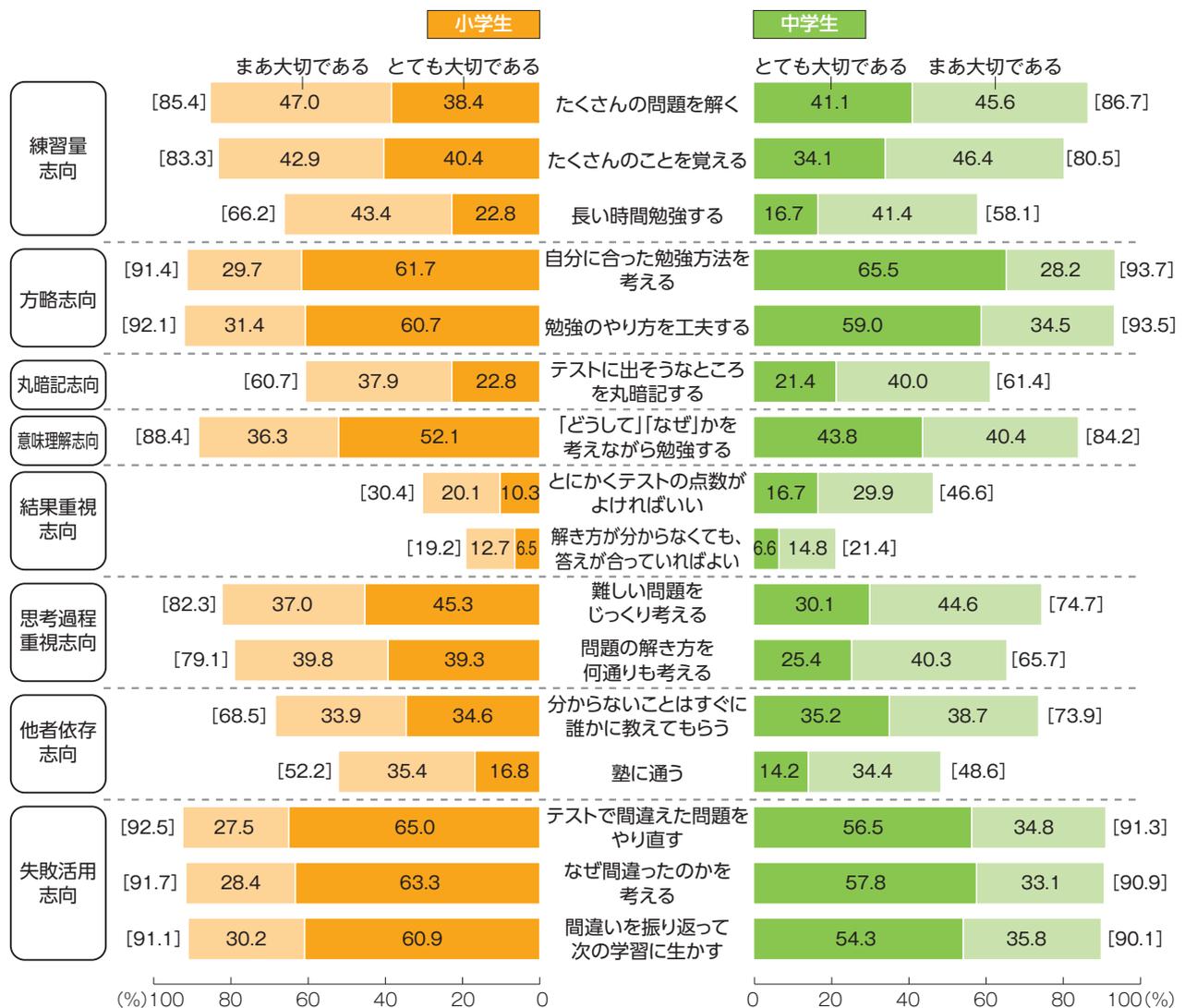
7 学習に対する考え (学習観)

勉強方法を工夫すること、失敗から学ぶことが「大切」と考えている
小中学生は9割。

学習に対する考え(学習観)では、「長い時間勉強する」(小学生66.2%、中学生58.1%)、「難しい問題をじっくり考える」(小学生82.3%、中学生74.7%)について、「大切」(「とても」+「まあ」以下同様)と答える比率が中学生になると低下する。一方、「とにかくテストの点数がよければいい」(小学生30.4%、中学生46.6%)は中学生のほうが15ポイント以上高い。学校段階があがるにつれて、勉強は長い時間をかければいいのではなく、勉強方法を工夫することも大切であると認識するようになるが、定期テストなどの成績をより意識せざるをえなくなる姿もまたこのデータから読みとれる。

Q 勉強について、次のようなことはどれくらい大切だと思いますか。

図7-1 学習に対する考え(学校段階別)



注1) 各横棒の外側にある数値は「とても大切である」+「まあ大切である」の%。

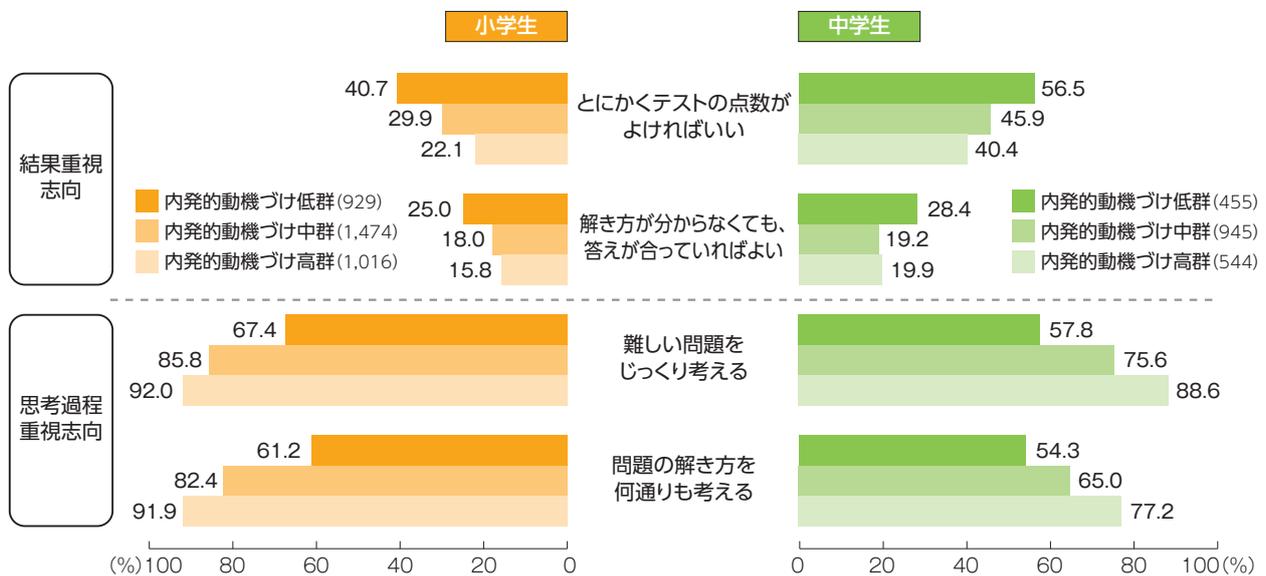
注2) 学習観に関する分類は、東京大学の市川伸一研究室で開発された尺度を参考にしているが、「環境設定志向」にあたるものは内容・名称を変更して「他者依存志向」とした。また、それぞれの志向の質問項目は、ベネッセ教育総合研究所で作成したものである。

内発的動機づけが高い子どもはテストの点数よりも問題の解き方や考え方を重視する学習観が強い。

内発的動機づけが低い子どもは「とにかくテストの点数がよければいい」「解き方が分からなくても、答えが合っていればよい」が「大切」（「とても」+「まあ」以下同様）と回答した割合が高く、内発的動機づけが高い子どもとの間に約10～20ポイントほどの差がある。一方、内発的動機づけが高い子どもは「難しい問題をじっくり考える」「問題の解き方を何通りも考える」が「大切」と回答した割合が高く、内発的動機づけが低い子どもとの間に20～30ポイント近くの差がある。内発的動機づけが高い子どもは学習に対して結果重視ではなく、思考過程重視の考えを持っていることが分かる。

Q 勉強について、次のようなことはどれくらい大切だと思いますか。

図7-2 勉強する理由と学習に対する考えとの関係(学校段階別)



注1) 「とても大切である」+「まあ大切である」の%。
 注2) 勉強する理由をたずねた内発的動機づけ「勉強することが楽しいから」「新しいことを知ることができてうれしいから」「問題を解くことがおもしろいから」の3項目から得点を算出し、内発的動機づけ「低群」「中群」「高群」と3分割した。
 注3) 学習に対する考えをたずねた16項目のうち、「結果重視志向」を問う2項目と「思考過程重視志向」を問う2項目を取り上げた。
 注4) ()内はサンプル数。

基礎知識…学習観

学習観とは、学習に対する考え方や価値観のことである。

非認知主義的学習観	認知主義的学習観
練習量志向 学習はたくさん覚えたり、練習したりすればよいという考え方。	方略志向 勉強のやり方や、自分に合った勉強方法を工夫することを重視する考え方。
丸暗記志向 学習内容を暗記すればよいという考え方。	意味理解志向 学習内容の意味を考えたり、解き方や考え方を確かめながら学習を進める考え方。
結果重視志向 「とにかくテストの点数がよければいい」「結果さえよければいい」という考え方。	思考過程重視志向 結果がよくても悪くても、その理由を考えることが大切であるという考え方。
他者依存志向 分からない時、自分で考えるより、すぐ周りの人や、塾などに頼ればよいという考え方。	失敗活用志向 間違っことで、理解不足に気づき、よりよく分かるようになるという考え方。

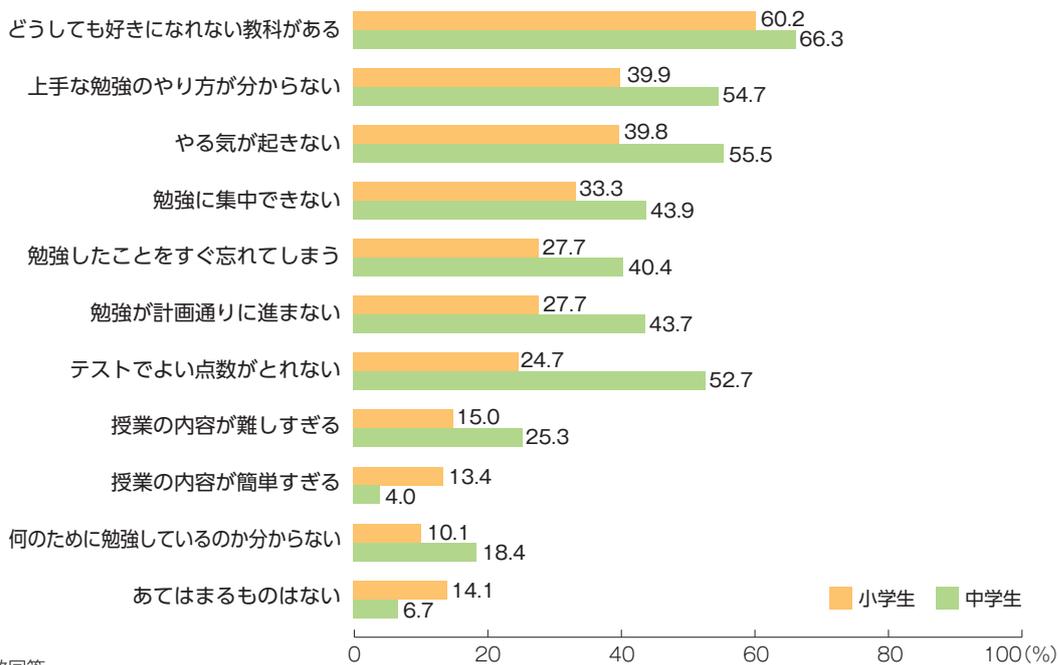
学習観に関する分類は、東京大学の市川伸一研究室で開発された尺度を参考にしているが、「環境設定志向」にあたるものは内容・名称を変更して「他者依存志向」とした。

学習上の悩みとして「どうしても好きになれない教科がある」をあげている小中学生は6割。

「どうしても好きになれない教科がある」(小学生60.2%、中学生66.3%)につづき、「上手な勉強のやり方が分からない」(小学生39.9%、中学生54.7%)、「やる気が起きない」(小学生39.8%、中学生55.5%)が、小中学生の学習の悩みの上位になっている。また「テストでよい点数がとれない」を選択した中学生は52.7%で、小学生から倍以上増加している。全般的に中学生になると、学習の悩みが大幅に増えていることが分かる。

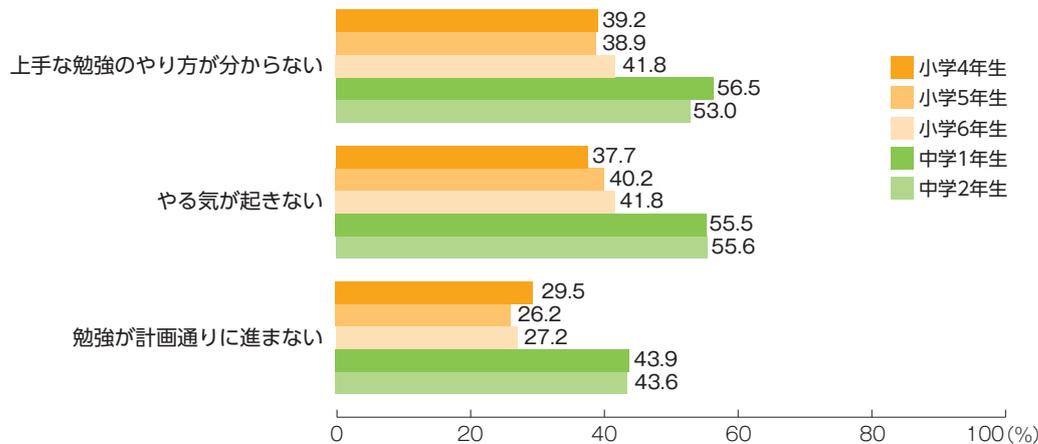
Q あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

図8-1 学習上の悩み(学校段階別)



注) 複数回答。

図8-2 学習上の悩み(学年別)



注) 学習上の悩みのうち、「上手な勉強のやり方が分からない」「やる気が起きない」「勉強が計画通りに進まない」の3項目をピックアップし、学年別のデータを図示した。

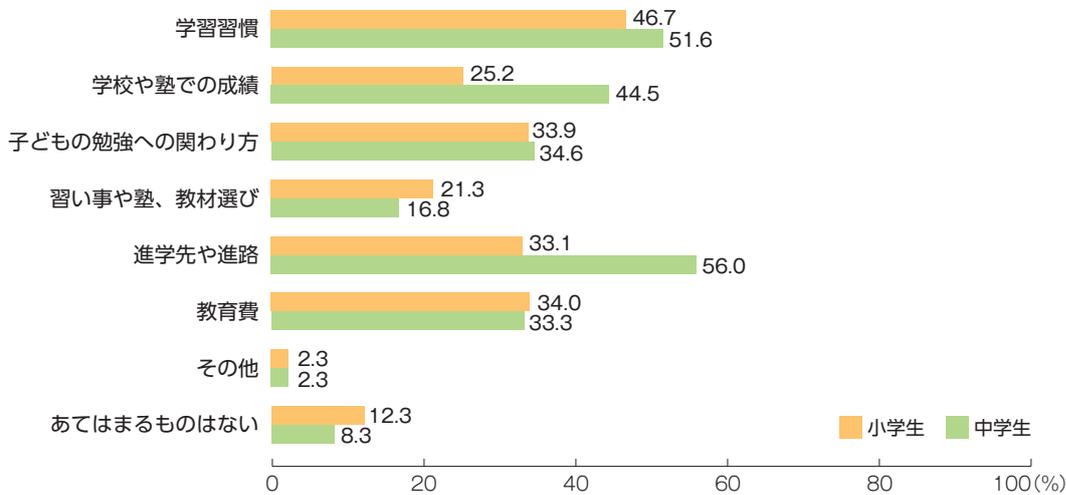
9 保護者の関わり—子どもの学習に関する悩みや気がり—【保護者調査】

子どもの学習に関する悩みで、小中学生を通じて高いのは「学習習慣」で5割前後。「学校や塾での成績」「進学先や進路」に関する悩みは、中学生で大幅に増加。

保護者の子どもの学習に関する悩みや気がかりをみると、小中学生であまり変化がないのは「学習習慣」「子どもの勉強への関わり方」「教育費」である。一方、小学生から中学生にかけて悩みの変化が大きいのは「学校や塾での成績」(小学生25.2%→中学生44.5%)と「進学先や進路」(小学生33.1%→中学生56.0%)で、20ポイント前後の増加がみられる。また「進学先や進路」に関する悩みを保護者の希望進学段階別にみたところ、小学生は「大学・大学院まで」と回答した保護者が悩みが高いが、中学生では「専門学校・短大まで」と回答した保護者が悩みが高い。保護者の悩みの種類や内容は、保護者の進学希望段階によっても違いがありそうだ。

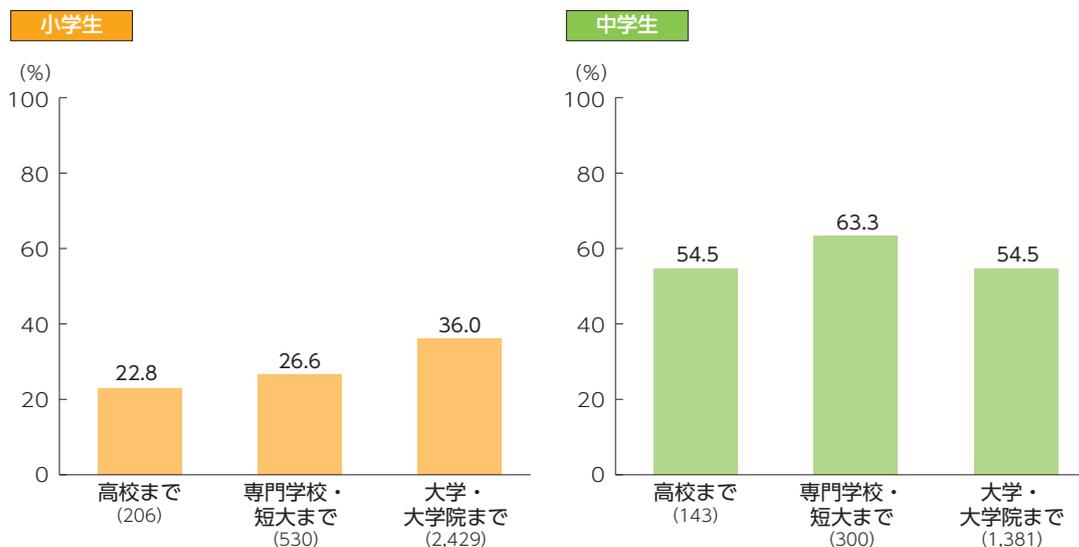
Q お子さまの学習に関して、次のような悩みや気がかりはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

図9-1 子どもの学習に関する悩みや気がり(学校段階別)



注) 複数回答。

図9-2 「進学先や進路」に関する悩み(保護者の希望進学段階別・学校段階別)



注1) 「高校まで」は保護者調査票で保護者が希望する子どもの進学段階について「中学校まで」「高校まで」と回答した人、「専門学校・短大まで」は「専門学校・各種学校まで」「短期大学まで」と回答した人、「大学・大学院まで」は「大学(四年制大学)まで」「大学院(六年制大学を含む)まで」と回答した人。

注2) ()内はサンプル数。

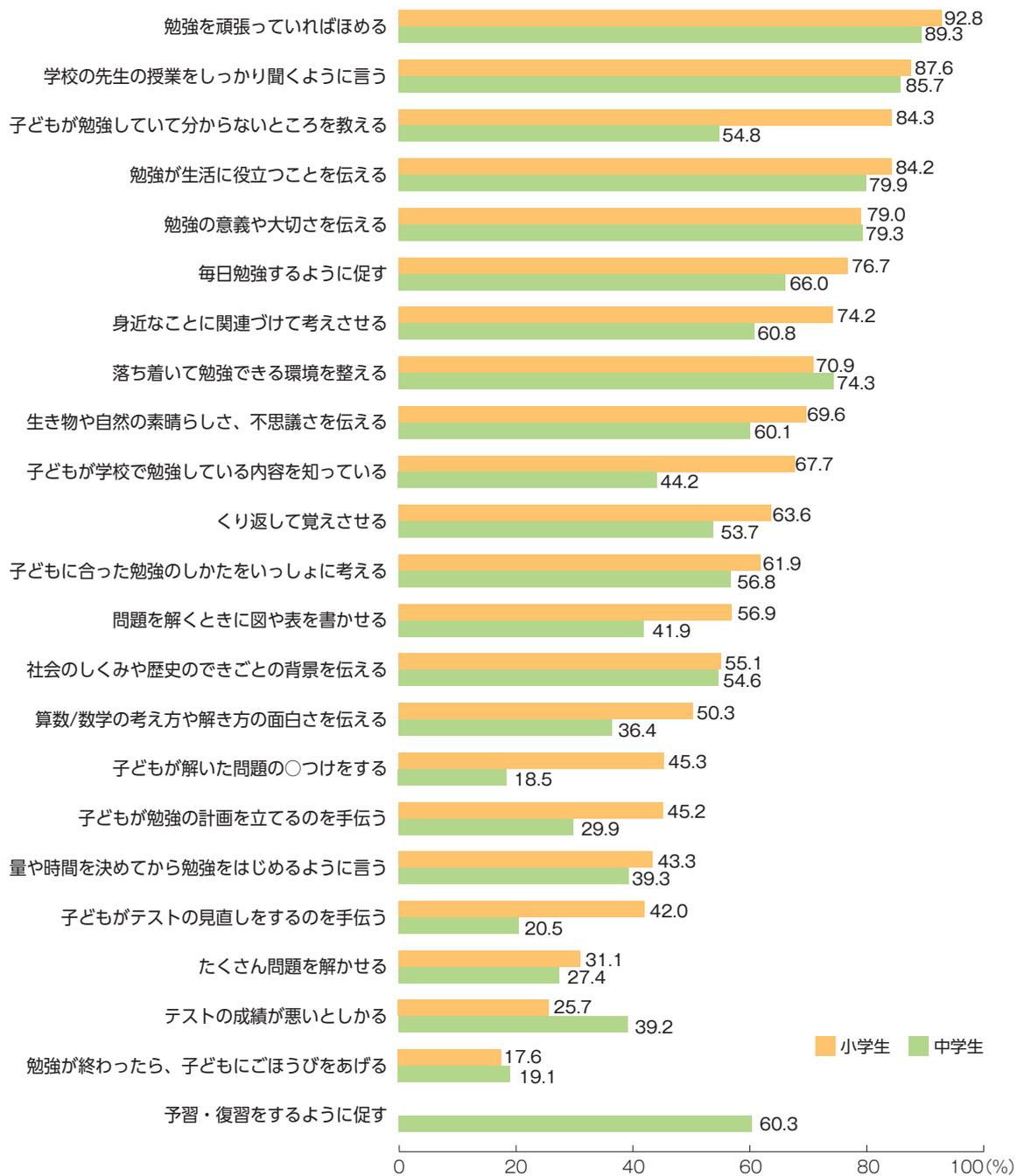
9 保護者の関わり—子どもの学習への関わり—

小学生から中学生にかけて、子どもの学習への直接的な関わりは、減少傾向。

保護者の子どもとの関わりの上位は「勉強を頑張っていればほめる」「学校の先生の授業をしっかり聞くように言う」で8～9割（「とても」+「まあ」以下同様）である。小学生から中学生にかけて変化が大きいのは「子どもが勉強していて分からないところを教える」「子どもが学校で勉強している内容を知っている」「子どもが解いた問題の〇つけをする」「子どもがテストの見直しをするのを手伝う」といった直接的な関わりで、20ポイント以上減少している。

Q ふだんのお子さまとの関わりについて、次のことがどれくらいあてはまりますか。

図9-3 ふだんの子どもの関わり(学校段階別)



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 「予習・復習をするように促す」は中学生の保護者にのみたずねた。

保護者の子どもへの関わり方(動機づけ支援)は子どもの学習動機づけやその種類に影響している。

小中学生ともに「内発的動機づけ支援」や「同一化的動機づけ支援」をしている保護者の子どもは、それらをしていない保護者の子どもと比べて、「内発的動機づけ」「同一化的動機づけ」によって学習する傾向がみられた。これらの結果から、保護者の関わり方が、子どもの動機づけやその種類に影響していることがうかがえる。

図9-4 保護者の関わりと子どもの動機づけとの関係(学校段階別)

		子どもの内発的動機づけ(3段階)								
		小学生			中学生					
		高群	中群	低群	高群	中群	低群	(%)		
内発的動機づけ支援の有無 【保護者の関わり】	社会のしくみや歴史のできごとの背景を伝える	あてはまる (1,887)	33.1	42.7	24.3	(1,061)	31.2	49.0	19.8	
		あてはまらない (1,508)	25.5	43.7	30.8	(844)	23.9	48.1	28.0	
	算数/数学の考え方や解き方の面白さを伝える	あてはまる (1,724)	34.9	44.4	20.7	(704)	35.2	47.0	17.8	
		あてはまらない (1,674)	24.4	41.8	33.8	(1,202)	23.7	49.6	26.7	
	生き物や自然の素晴らしさ、不思議さを伝える	あてはまる (2,382)	31.9	43.5	24.5	(1,166)	29.9	47.7	22.4	
		あてはまらない (1,017)	24.5	42.2	33.3	(740)	25.0	50.0	25.0	
		子どもの同一化的動機づけ(3段階)								
		小学生			中学生					
		高群	中群	低群	高群	中群	低群	(%)		
		同一化的動機づけ支援の有無 【保護者の関わり】	身近なことに関連づけて考えさせる	あてはまる (2,515)	40.3	28.9	30.8	(1,175)	38.7	32.9
あてはまらない (855)	34.2			25.5	40.4	(712)	31.9	31.6	36.5	
勉強が生活に役立つことを伝える	あてはまる (2,854)		40.4	28.3	31.3	(1,541)	37.4	32.6	29.9	
	あてはまらない (516)		29.8	26.6	43.6	(345)	30.1	31.6	38.3	
勉強の意義や大切さを伝える	あてはまる (2,677)		41.2	28.2	30.6	(1,531)	37.8	32.1	30.2	
	あてはまらない (693)		29.3	27.3	43.4	(357)	29.1	33.9	37.0	

注1) 「内発的動機づけ」「同一化的動機づけ」の用語解説はP.15を参照。

注2) 「あてはまる」は保護者の子どもとの関わりについて「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した人、「あてはまらない」は「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答した人を示している。また無回答・不明を除外して数値を算出している。

注3) 子どもの内発的動機づけ(3段階)：子ども調査票・勉強する理由について「勉強することが楽しいから」「新しいことを知ることができてうれしいから」「問題を解くことがおもしろいから」の3項目から得点を算出し、得点分布が「高群」「中群」「低群」で均等になるように3分割した。
 子どもの同一化的動機づけ(3段階)：子ども調査票・勉強する理由について「ふだんの生活に役立つから」「世の中に役に立つ人になりたいから」「自分の夢をかなえたいから」「将来いい高校や大学に入りたいたいから」「将来安定した仕事につきたいから」の5項目から得点を算出し、得点分布が「高群」「中群」「低群」で均等になるように3分割した。

注4) ()内はサンプル数。

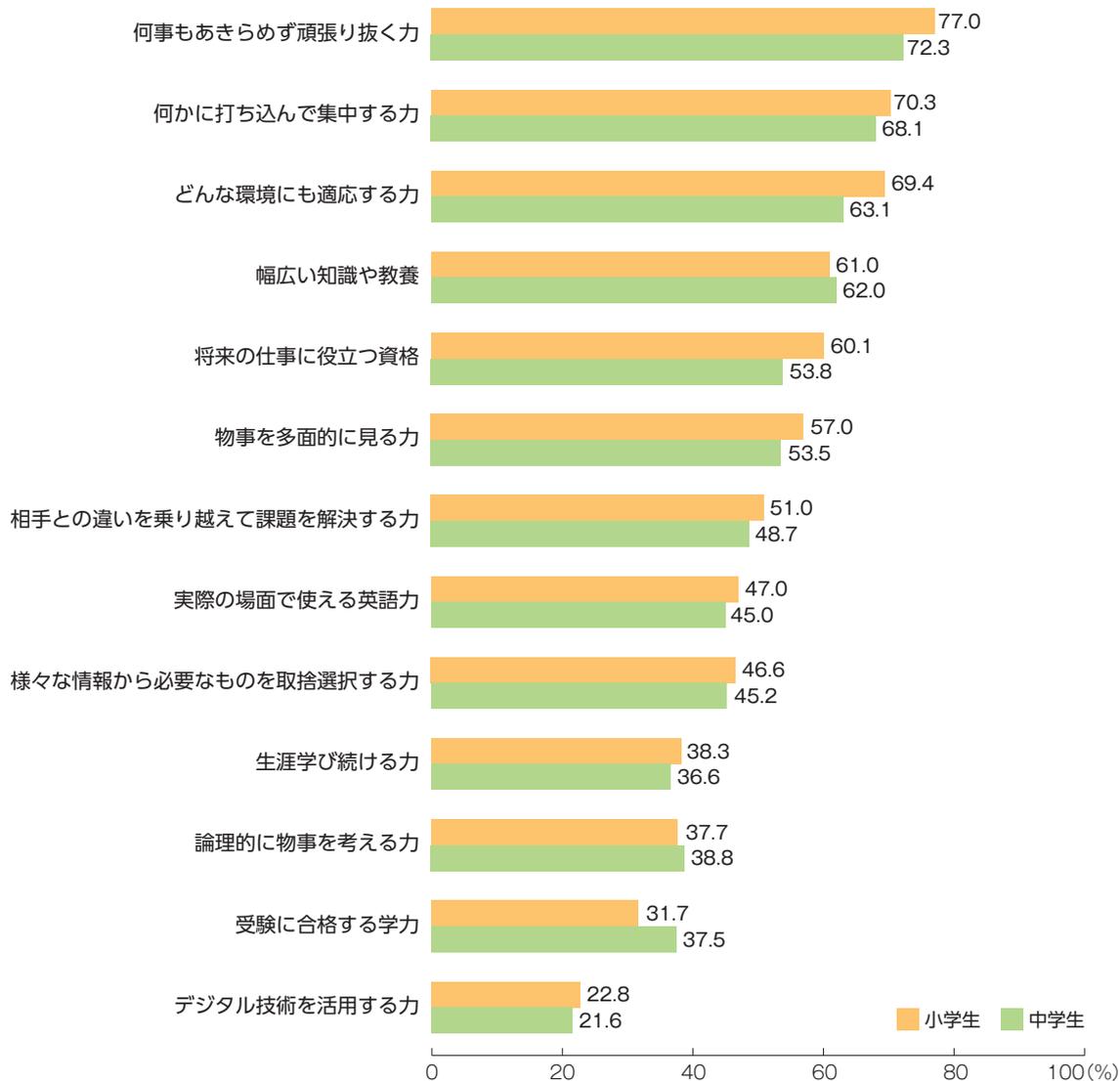
9 保護者の関わり—子どもに身につけてほしい力—

保護者が子どもに身につけてほしいと思う力の第1位は、「何事もあきらめず頑張り抜く力」。

小学生と中学生で身につけてほしい力に大きな違いはみられない。保護者が子どもに身につけてほしい力の第1位は、「何事もあきらめず頑張り抜く力」で7～8割弱（「とてもそう思う」以下同様）。次いで「何かに打ち込んで集中する力」「どんな環境にも適応する力」が続く。「実際の場面で使える英語力」や「生涯学び続ける力」「受験に合格する学力」は3～4割台である。

Q あなたはお子さまに次のような力を身につけてほしいと思いますか。

図9-5 子どもに身につけてほしい力(学校段階別)



注) 「とてもそう思う」の%。

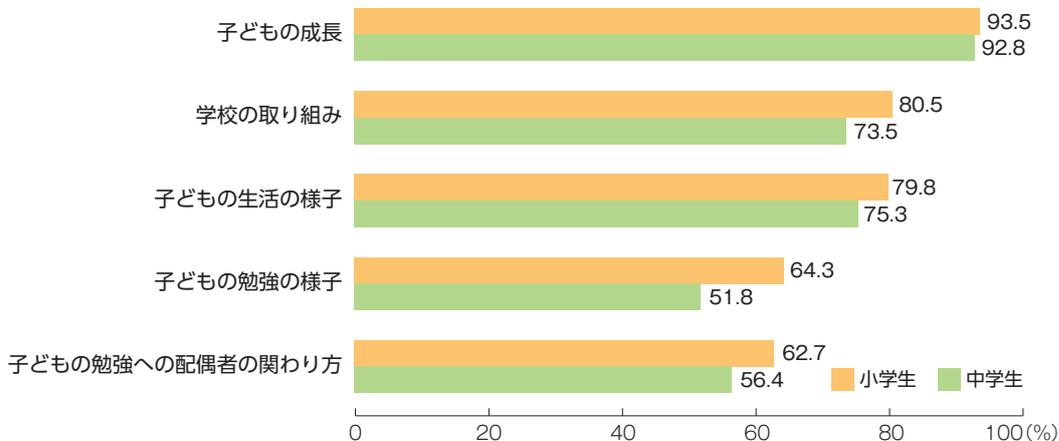
「子どもの勉強の様子」に対する保護者の満足度は小学校から中学校にかけて低下している。

小中学生ともに満足度が高かったのは「子どもの成長」で9割である。次に「学校の取り組み」「子どもの生活の様子」が7～8割と続く。小学生から中学生にかけて満足度の変化が最も大きかったのは「子どもの勉強の様子」（小学生64.3%→中学生51.8%）であった。

また保護者と子どもの努力に対する意識「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」の学年変化をみたところ、子どもの意識は学年があがるにつれて減少しているが、保護者の意識はほとんど変わらない。

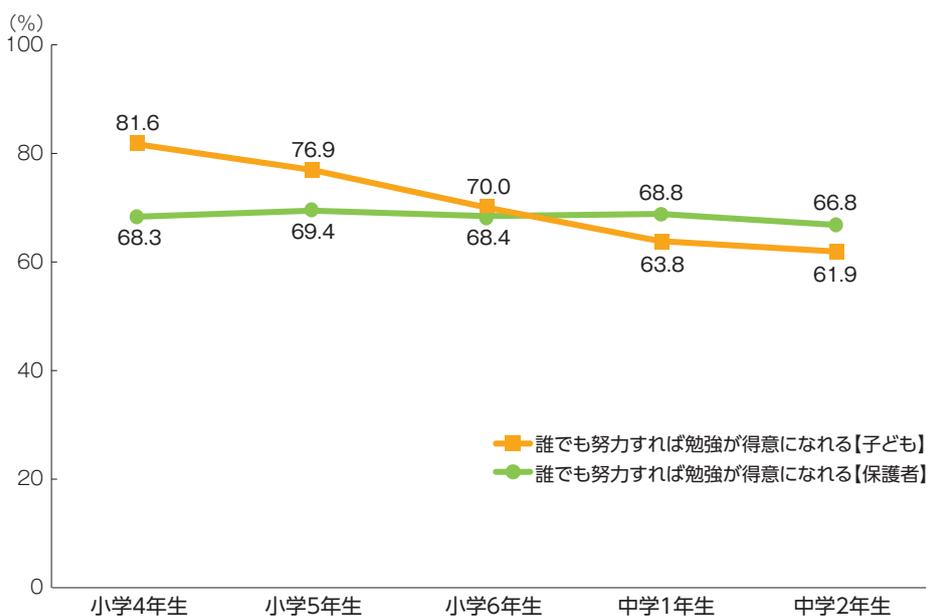
Q あなたは以下のことについて、どれくらい満足していますか。

図9-6 保護者の満足度(学校段階別)



注) 「とても満足している」+「まあ満足している」の%。

図9-7 勉強に対する意識「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」(親子別・学年別)



注1) 「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」は、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 無回答・不明を除外して数値を算出した。

「小中学生の学びに関する実態調査」

調査企画・分析メンバー

伊藤 崇達	京都教育大学 准教授
外山 美樹	筑波大学 准教授
須藤 康介	明星大学 助教
木村 治生	ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室 室長
邵 勤風	ベネッセ教育総合研究所 主任研究員
木村 聡	ベネッセ教育総合研究所 研究員
佐藤 昭宏	ベネッセ教育総合研究所 研究員

*所属・肩書きは、調査企画・分析時のものです。

本調査の詳細な分析は 2015 年 2 月末から順次ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室の WEB サイトにアップする予定です。

ベネッセ教育総合研究所のWEBサイトのご案内

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室で実施している
各種調査の結果は、すべて以下の WEB サイトでご覧いただけます。

<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/>

こちらのサイトは で検索できます。

● お問い合わせ先 ●

本調査に関するご意見・ご感想・お問い合わせは、下記までお願いいたします。

(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

「小中学生の学びに関する実態調査」係

TEL:042-311-3390 (10:00 ~ 17:00 / 土日・祝日を除く)

「小中学生の学びに関する実態調査」速報版

発行日：2014年10月31日 発行人：谷山 和成 編集人：木村 治生

発行所：(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

編集協力：(株)ジー・アンド・ピー

4TT012

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。